



選考委員特別賞 那須正幹賞

競輪

北九州市立曾根中学校 三年

八谷 達磨

「北九州発祥のものって何がある？」東京の従兄弟から聞かれて「福岡までアリだったらかるけど、ほらひよことか」としか答えることができませんでした。その後、がんばって考えましたが、中学一年生の時にウォークラリーで見つけた「バナナの叩き売り」しか思いつかず、自分の街についてもっと知っておくためにも北九州市発祥のものを調べてみました。すると、思いの外たくさんあり、「アーケード商店街」や「焼きうどん」、「OTTO」に「都市モノレール」、「パンチパーマ」さらに「若戸大橋（日本の長大橋第一号）」、「競輪」など普段

よく見かけるものがたくさんありました。

僕は、北九州市発祥のものがたくさんあることを知ったと同時に、競輪が北九州市発祥であることにとても驚きました。僕の父は競輪選手だからです。しかし、僕は競輪について、父が競輪選手であることと、競輪場はギャンブルをするところであることくらいしか知りません。僕は、身近にあるようであまり知らなかった競輪について、この機会に理解しておこうと思い、初歩的なところからと、まず、どうして競輪は生まれたのか、歴史について調べてみました。

競輪は、太平洋戦争終結後に、海老澤清と倉茂武という二人が「自転車産業の復興とサイクルスポーツの振興」を大義名分として、戦前に人気を得ていた自転車レースを競馬に真似て賭けの対象にし、その収益金をもって戦後復興に役立てることはできないものか、と考え出したものが今の競輪です。そして、その二人が政府に働きかけて、自治体の「戦後復興費用捻出および自転車産業の発展」を目的とする自転車競技法が一九四八年の八月

に成立して、同じ年の十一月二十日に「地方の財政健全化と経済情勢全般の健全化、自転車産業の振興」を掲げ、国民体育大会の会場でもあった小倉競輪場で第一回競輪競走が開催され、ここに競輪が誕生しました。つまり、競輪はそもそも戦後復興の取り組みの一つだったということです。

また、全てがてさぐりの状態で始められた小倉競輪はいきなり赤字になる可能性もあり、職員に支払う給料もままならなかった時代であったため、開催そのものが賭けであったそうです。けれども、第一回小倉競輪は予想を上回る大成功をおさめ、競輪は財政難打開の手段として地方自治体へ広まり、第一回開催以降の五年間で六十三个もの競輪場ができ、全国へ広まってきました。当時、競馬が不振であったのに対して、競輪は爆発的人気があったそうです。現在東京ドームがあるところにも、以前は「競輪のメッカ」と呼ばれていた後楽園競輪場があったそうです。僕は、一度だけ東京ドームへ行っただけですが、そこは東京という大都市の中でも立地

がいいそうで、当時はかなり競輪が人気であったことがわかりました。

しかし、大きな人気とは裏腹に、主催者側が不慣れで、選手へのルールや理念などに対する教育不足、客が自転車競技の特性を理解しきれていなかったことなどが原因で、ギャンブルの特性上お金を賭けるため、問題が発生すると暴動事件に発展することもあったそうです。これに対して、自治体が開催の規制などを行ったためファンの競輪離れが起こり、競輪は徐々に衰退へと向かっていきました。その後、相次いでいくつかの競輪場が廃止されました。先ほどの競輪のメッカ後楽園競輪は一九七三年に閉鎖されてしまい、今では四十三箇所までに減り、二十箇所もの競輪場が廃止してしまいました。門司区にあった門司競輪場もその一つで、今でもプロやアマチュアの選手が練習場として使ったり、車券を買ったりできるようになっていますが、近いうちに撤去されることが門司区の今後の方針で決定しています。

戦後復興が一つの目的であった競輪は、時代の移り変

わりとともに衰退していきつつけるのでしょうか。それとも、食い止めることはできるのでしょうか。歴史については大きな流れを理解できたので、僕はこの問題を解決する方法を見つけたく、また、現在の競輪についてとても気になり、さらに調べてみました。

人気のスポーツは、どのアンケートでも、サッカーや野球が上位を占めていましたが、プロ選手の人口が一番多いスポーツは、なんと競輪でした。競輪選手の人口は、年々減っているものの全国に約四千人います。「あれ?」と思いました。一試合に出る人数は、両チームで、控えの選手を含まない場合でも、サッカーは二十二名、野球が十八名で行われるのに対し、競輪は一レースを九人で競い合います。「一回のレースを行う選手の人数は、人気のスポーツよりも少ないのに、どうしてプロ選手の人口が日本で一位なんだろう。」と思いました。その理由までは見つかりませんでした。そこで、父に聞けば何か手がかりになるものがあるかもしれない、競輪についてももっとわかるだろうと考え、質問してみました。す

ると父は、どうやって競輪選手になったかから教えてくれました。父が「高校二年生のときは、まだ自転車をしていなかったんだ。それまでは大学へ行こうと思っていったんだけど、自分がやりたいことを考えたとき、大学にはそれが無かった。おじーじ（僕の祖父）が競輪選手だったから、競輪選手という選択肢はあって、自分のやりたいことは競輪選手だとそこで気づいたんだ。」と言ったとき、僕が「そういえば前に、高校の先生に競輪選手になりたいって言ってすごいおどろかされたって言ったけどあれはなんで?」と聞くと、「さっきも言った、そのときは自転車に乗ってなかったことと、運動も大得意ではなかったからだよ。だからその後、高校三年生から毎朝四時に起きて、学校に行く前に平尾台を自転車で登ったり、競輪場へ行つて、ウェイトトレーニングをしたりとでもきつい練習をしたんだ。」と教えてくれて、「じゃあその練習のおかげで試験に受かることができたんだね」と言うと、「最初は全然ダメだった。でも当時は半年に一回試験があったから、『次は絶対に受かってやる』

という気持ちでよりきついトレーニングをしたり、今まで見てきた選手の走りを再現・工夫したりした。それで、二回目の試験を臨んだけど、ギリギリで落ちて、三回目で受かったんだ。二回目も一回目のときと比べると凄くよくなったから、強い気持ちややる気を持つことは大事だと思ったよ。」と答えてくれました。どれほど難しい試験だったかが気になり、「どんな試験だった？そのときと今で違いはある？」と聞くと父は「当時と今では一次試験を受ける場所が小倉競輪場だけになったことくらいかな。受験内容は、まず一次試験で千mと二百mの走行時間を一発勝負で測り、千人が百五十人ほどに絞られ……」思わず「えっ。」と声が飛びだした。「そんなに。」と聞くと、「まあ一次試験はこんな感じ。しかも、受ける人のほとんどが、自転車競技を高校で三年間や中学からやっている人、さらには大会に出るような経験が長い人が集まる中でだから並大抵の努力じゃダメなんだ。それに、二次試験ではその半分の七十人になるよ。これは今も変わってなくて、身体検査と人物検査(学科や面接、

作文等)を静岡県の競輪学校で受けるよ。これが一般試験の技能試験で、他にも二つ試験があって、オリンピック種目や世界規模の自転車競技レースで優秀な成績を収めた人が対象の特別選抜試験と、自転車の競技経験が無い人達が対象で、自転車に対する運動能力を測定する適性試験と言うよ。今でも、選手になりたい人は多いから、何回も受ける人もたくさんいるんだ。」父の話によると、競輪選手も多いけれど、競輪学校を受験する人、つまり選手になりたい人も多いことがわかりました。

けれども、なぜ競輪が日本で一番プロ選手が多い競技であるのがわからなかったため、話の途中でしたが、単刀直入に聞いてみました。父は、「競輪選手が多いのは、競輪の一レースは九人で走るけど、十二レースで開催されるから、それを四十三の競輪場でまわしていくにはそれくらい必要でしょ。」アツと僕は思いました。「どうして気付かなかったんだ。」確かに、一回のレースを行うのは九人です。しかし、レースが開催されると二つのクラスで合計十二レースを勝ち抜き戦で、一人当たり

三回か四回レースを行うことになりました。そのため、各地で開催されるレースをうまくまわしていくためには、数千人という選手が必要であることに気が付きました。また、全国の都道府県全てに自転車競技部を持った高校があるそうで、そこから選手になる人が多いということです。

競輪のプロ選手の人口が多い理由はわかりましたが、まだ、競輪の人気を復活させる方法は見つかりませんでした。僕は、さらなる発見を求めて、父の話の続きを聞きました。

「さっきの試験に受かると、競輪選手の資格を取るために競輪学校へ行くよ。学校は静岡県伊豆の山奥にあつて、とても広く（約五万坪。東京ドーム三個分より少し大きい）、富士山がよく見える。入学して最初は、軍隊のような運動訓練をさせられて、一糸乱れぬ動きで並んだり行進したりするんだ。毎朝六時半と毎晩九時に点呼があつて、朝は素早くきれいにフトンを片付けて、宿舎前に集合するんだ。遅れることは決して許されず、とに

かく時間厳守。練習はもちろんハードだけど、規律を重視していたね。後、学科の勉強やテストもあつたり、プロとして覚えなないといけないことも学ぶんだ。連絡や外出も限られる。こうして約一年間の学校生活を過ごして、国家試験に受かつて卒業した人が選手になれるんだ。」

へえ、国家資格が要るのか、と驚きながら、「最近テレビで、よく競輪学校を見かけることがあるけど、あれすごい厳しいよね、どうだった。」と聞くと、「競輪学校は厳しかったけど、きちんと決まりを守っていれば怒られることはないし、練習も厳しかったけれど、選手になるうって決めてから学校に入るまでの練習が一番きつかった。」と父は答えてくれて、母曰く、昔（選手になった後）の父は、今よりも細かつたそうで、高校の先生に驚かれるくらいだから、選手になると決めた日から今日まで続けている努力はもの凄いで表せないほどのもののように感じます。

また、現在の父は、体格も大きいのですが、それは、体重が重いほど自転車のスピードが出るため、自ら体を

作り上げたそうです。ただ単に、食事を多く摂るのではなくて、バランスに気を付けて食べたり、サプリメントやプロテインを利用したりして工夫しているそうです。

現在でも父は、ほぼ毎日休みなく練習したり、自分の過去のレースや、他の選手のレースを見て研究したりしています。今回、様々な質問を父にしましたが、どの答えもネガティブな答えではなく、前向きな返答ばかりで、僕は、聞いていてとても気分が良く、父はこの仕事に誇りを持っているのだと感じました。

このような、立派な仕事が失われてほしくない僕は強く思いました。二〇〇〇年のシドニーオリンピックから、「ケイリン」として、日本の競輪を元にした競技が加わりました。日本で培われた競輪の歴史は、海外でも評価されている証のように思います。

近年、競輪を運営する側も、ナイター競輪（夜に行うレース）よりも遅い時間帯にある、ミッドナイト競輪を開始したり、ガールズ競輪を復活させたりと、様々な取り組みをしているそうです。

現在、衰退の流れにある競輪ですが、機械のギャンブル（パチンコなど）・馬を使ったギャンブル（競馬）・エンジンを使った乗り物のギャンブル（競艇、オートレースなど）とは違う、選手の体と心がレースの勝敗を決めるというおもしろさを持っていることを、もっと多くの人に知ってもらうことが、競輪の復活につながるのではと思いました。

最後に、父に「今の目標は。」と聞くと、「あと十年は続けること」と答えました。競輪選手が引退する平均年齢は、四十代半ばですが、父は現在四十一歳です。しかし、不可能ではないので、きっと父なら達成できると思います。努力をすれば、どんなに厳しい試験や目標もクリアできるので、競輪の人氣は復活できると確信しました。僕はまだ、はつきりとした将来の夢はありませんが、それが見つかった時は「絶対に諦めず、気を抜かずに努力をしよう。」と心に決めました。